

第16部会

シュトゥットガルト上級教育庁の決定は、法的な根拠が不十分であるとした。また、教育庁の決定は、基本法第四条で保障されている信教の自由と、公職就任に際して宗教上の信仰によって差別を受けないと規定する同法第三三条に抵触しているとして、ルディンの訴えを認める判断を下した。しかし、それと同時に、連邦憲法裁判所は、文化高権を持つラントが、学校の中でムスリムのスカーフなどの宗教的な要素をどの程度まで許容するかを、憲法の枠内で法的に規定できるとした。こうした連邦憲法裁判所の判断を受けて、ドイツ各州は新たな宗教規定に関する法整備に向けて動き始めた。ドイツ全十六ラントのうち、八つのラントが公立学校の教員による授業中のスカーフ着用を禁止する法案を議会で可決させた。さらに、そのうちの七つのラントが、キリスト教とユダヤ教の宗教シンボルをムスリムのスカーフと区別し、前者については、以降も着用を認めるとした。

宗教の平等な取り扱い命令が基本法に規定されているにも関わらず、一部のラントにおいて、キリスト教とユダヤ教の宗教シンボルがムスリム女性の着用するスカーフと同列視されずに済んだのはなぜか。それを可能にしたのは、「文化」であった。文化高権を巧みに利用し、キリスト教とユダヤ教を、一宗教としてではなく、歴史的にラントに大きな影響を与えてきた「キリスト教的・西洋的な文化価値」として表現することで、宗教的なダブル・スタンダードが正当化されたのである。

近年、移民の社会的な統合の必要性が意識化される一方、文化的差異をめぐる議論に大きな関心が集まっている。包摂と排

除の論理に文化が用いられる今日的な文脈の中で、文化としての宗教が語られることは、国家の枠内にさらなる社会的亀裂を生むことにつながるのではないか。

多文化共生

——不況の中の大泉——

野村 誠

今年七月二十五日の大泉祭り（通称大泉サンバ）に筆者は参加した。不況にあえぐ多文化共生の大泉町で、お祭りの果たす機能、役割を調査しにいった。七月三十一日大泉町資料によれば群馬県東毛地区の大泉町は日本で最も外国籍住民の比率が高い（一六％）地域である。一九八九年に、『東毛地区雇用安定促進協会』を結成してブラジル等から組織的に労働者の受け入れを模索し、それを実現している（『サンバの町から』上毛新聞社、一九九七年、一一二四頁）。ただし、こうした申し入れの主体はあくまでも中小零細企業群であって大企業それ自体ではない（梶田孝道・丹野清人・樋口直人『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会、二〇〇六年、一一二頁）。かくして中小零細企業でのニューカマーの雇用は、不安定である。

「雇用と教育問題」大泉町では、町長自らがブラジルに飛び就労ルートを開拓してきたので、外国人の受け入れは行政主導であった（同、二四八頁）。ところが町長が変わり、行政の方向が外国人に対するサービスから日本人住民へのサービスの向

上に変わると、共生社会の矛盾が明白にあらわれてくる。「町長の交代だけで、行政主導の共生は大きな方向転換をする」(同、二四九頁)「地方参政権を持たないブラジル人にとって、そこで生活しつつも、自らの条件を良くすることを政治的にかなえることはできない」(同)。彼らは、祖国日本に憧れと経済的発展の恩恵を求めて移住してきた。しかし、今日の世界的不況下で、彼らは派遣切や雇い止めにあい厳しい状況にある。大泉町の食堂経営者は、昨年秋リーマンショック後から売り上げが半分になったと言っている。また「上毛新聞」九月三日の記事では、大泉の南米系外国人事業所で六月二十五・二十六日実施のアンケートの結果、七割が「経営悪化」と報じている。ブラジル人学校は学校としてみなされていないので、補助金の対象とならない。かくして児童・生徒の不就学児の増加となる。「毎日新聞」七月二十五日の「新教育の森」は町内のブラジル人学校「日伯学園」を次のように記している

二〇〇人以上いた生徒が、今年に入ってから急激に減り始め、今は八〇人になった。学校をやめた生徒のうち、三割がブラジルへ帰国。同じく三割は日本の公立校へ転校し、残りは不就学という。戸澤江梨香園長(四三)は「公立学校と違って、ここは日系人のアイデンティティーを保つために重要。学校に來られなくなった子にたまに会うと、どんどん表情が暗くなり、大人の顔を見なくなっている。非常に心配だ」と話す。

保護者の雇用問題は、児童・生徒にとって教育問題となり社会的にも深刻である。

「大泉祭り(サンバ)」町役場では例年より寄付金も少なく、催し物も少ないとのことであった。しかし陽気で楽天的なラテンアメリカからのニューカマーの人々は、不況の中でも明るかった。お祭りでは、ブラジルの食べ物や飲み物が売られ、リズムの効いた音楽が流れ活気があり、人々の出会いと再生、連帯と相互扶助、情報交換がなされていた。お祭りによって共同体が再生され、新しい共同体の生命が創り出されている。大泉祭り(サンバ)はカトリック・キリスト教の文化的表現であり、日系ブラジル人の市民宗教としての存在の表現である。サンバはブラジル人の文化的シンボルであり、さらに他の宗教文化との対話がなされている。大泉では、大泉祭りが中心となって多文化共同体を形成している。大泉のニューカマーたちは失業者を助け合い困難を乗り越えて生きている。それでも最近では、以前より仕事が入るようになってきたとのことである。ニューカマーの逞しいパワーと連帯を大泉祭りの中に見出した。

宗教間対話を支えるものとしての求道性

——東西霊性交流の場合——

峯岸 正典

本論では、一九七九年から今日まで三十年以上にわたって禅とカトリックの間の東西霊性交流が続くその要因を検討する。交通通信手段の発達、他の伝統に関する情報量の増加、それに